

盾と戈を持つ人物模型



●コレクション・データ

時代 弥生時代中期
 模型原案 清水風遺跡第2次調査
 製作年 2004年
 大きさ 高さ51.0cm、スケール3分の1
 展示位置 第1室 「まつりの風景」

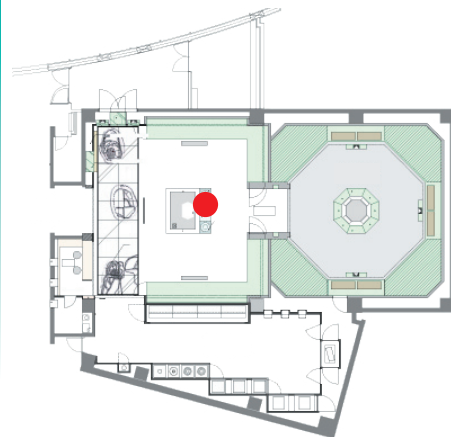
今回紹介するコレクションは、出土品ではなく、ミュージアムを開館するにあたり製作した模型で、約2000年前のまつりに参加した人物を3分の1のサイズで製作したものです。モデルは、清水風遺跡出土の絵画土器に描かれている「盾と戈を持つ人物」の線刻画です。この絵画は、ヘラでシンプルに刻まれているので、立体的で色彩を有する模型を製作することは、さまざまな点で考証を必要とし、大変難しい課題でした。

模型では、人物の衣装や持ち物、髪型、肌の色などさまざまな点が問題となりました。モデルの線刻画では、人物の頭に冠状のものが描かれています。これは民族(俗)学的な例証から鳥の羽で飾られた被り物とするのが大勢の見解です。したがって、鳥の羽をつけた被り物を想定し、男性が着けるものなので雄雄しい鳥としました。そこで、唐古・鍵遺跡から鷹の骨が出土しているので、そ

の羽で飾りつけました。また、手に持つ盾と戈も唐古・鍵遺跡から出土した盾や戈を参考にし、情報が不足する部分は、各地の遺跡から出土した遺物で補い復元しました。

このようにして再現した模型の人物は、一体どのような人だったのでしようか。金閼怒氏は、各地の弥生遺跡から出土する武器形の木製品(戈や剣など)が祭儀の際の模擬戦に用いられたのではないかとしています。また、近藤喬一氏は、盾と戈を持つ人物を戦闘儀礼風の踊りをする人とし、農耕儀礼を想定しています。2人の見解はまさに、この人物が弥生時代のまつりを執りおこなう人物だったことを示しています。

既に失われた2000年前の色や行為を再現することは至難の業ですが、さまざまな出土品の情報を総合することによって弥生時代の儀礼が復元できることをこの模型は語っています。



ミュージアム上面図と展示位置